

Title	フォリナー・トークの実際：非母語話者との接触度による言語調整ストラテジーの相違
Author(s)	筒井, 千絵
Citation	一橋大学留学生センター紀要, 11: 79-95
Issue Date	2008-07-30
Type	Departmental Bulletin Paper
Text Version	publisher
URL	http://doi.org/10.15057/15935
Right	

フォリナー・トークの実際 —非母語話者との接触度による言語調整ストラテジーの相違—

筒井 千絵

要旨

外国人住民の急増に伴い、すべての母語話者が日常的に非母語話者のサポートにあたることのできる環境の整備が求められている。しかし日本語能力が充分でない非母語話者とのコミュニケーションにおいては適切な言語調整が不可欠である。本研究においては、日本語母語話者と非母語話者のロールプレイを実施し、母語話者が、母語話者向けに書かれた文章を非母語話者に説明する場合、どのように言い換えるかを調査した。その結果、日常における非母語話者との接触の頻度や関わり方によって、説明のしかたに明確な相違がみられた。日常的に非母語話者との接触が少ない人は、辞書的な意味の説明を多く行うのに対し、非母語話者との接触の多い人の説明はより具体化されていて、例示という方法が多く用いられており、情報の再構成の程度が大きいことがわかった。

キーワード：フォリナー・トーク、言語調整、やさしい日本語、言い換え、接触場面

1 はじめに

河原・野山（2007）によると、外国人住民の急増に伴い、集住地域を中心に公的機関においては言語サービスの多言語化が進みつつあるが、すべての情報を多言語化することは現実的には不可能であり、周囲の母語話者の日常的なサポートが必須である。日本語能力が充分でない非母語話者を対象とする際には、特に母語話者側に適切な言語調整が求められる。しかし「適切な言語調整」とはどのようなものなのか。非母語話者とのコミュニケーションにおいて母語話者は簡略化した言語使用域、いわゆる「フォリナー・トーク」を使用する傾向があるが、それが必ずしも非母語話者にとってのわかりやすさにつながっているとは言えない。一方西原（1999）では、日本語教師による簡略化された言語使用域である「ティーチャー・トーク」は、非常にわかりやすいとしている。「ティーチャー・トーク」は「フォリナー・トーク」の一領域と位置づけられているが、そのわかりやすさの違いは何に起因するのか。本研究においてはその相違を明らかにし、「わかりやすい言語調整」とは何かを究明する一助とするため、母語話者を日本語教師・ホストファミリー・一般母語話者の3グループに分け、それぞれが非母語話者に対してどのように言語調整を行っているかを調査し、その特徴の分析を行った。

2 調査方法

日本語母語話者と非母語話者とのロールプレイと、ロールプレイ後のインタビューの発

話データの分析を行った。ロールプレイの設定は、『地域の日本人住民による外国人住民の自治会加入勧誘』とした。設定の意図は、以下の通りである。

- ① 地域の母語話者・非母語話者住民の接触場面としてあり得る場面であること
- ② 非母語話者側に背景知識が不足しており、母語話者による説明が必須であること
- ③ 非母語話者による話題の理解が必須であること

調査対象者、調査協力者の属性については以下の通りである。

- 調査対象者…日本語教師・ホストファミリー・一般母語話者各 3 名 計 9 名
(※以下の発話データにおいてはそれぞれ NST、NSH、NSI と称する)
- 調査協力者…初級後半～中級前半レベルの日本語非母語話者 計 9 名

両者とも事前に相手の情報は一切知らない状態でロールプレイに臨んでもらった。母語話者には「自治会入会のお願い」「自治会費納入のお願い」の 2 枚の用紙（以下「調査紙」と呼ぶ）をロールプレイ開始 10 分程度前に渡し、目を通した後、非母語話者のもとを訪れ、勧誘員として自治会勧誘を行ってもらった。

参考資料 1 調査紙 1

自治会入会のお願い

★私たちはより住みやすい街作りのために、地域の自治会活動の活性化を目指しています。

自治会は、各地域内に住む皆さんによって自主的に組織された団体です。地域における様々な問題解決に取り組むとともに、住民の生活環境の向上を目指し活動を行っています。

少年犯罪や凶悪犯罪の増加、ごみの捨て方や犬猫のフン害等のマナー問題などいろいろな問題が新聞紙上にも取り上げられる昨今、住民どうしの繋がりの薄さが、社会問題の原因にあげられるようになりました。こんな時代だからこそ、自治会を始めとした、地域の地道な活動や地域の人と人との繋がりが大切になっています。せっかく住んでいるこのまちで、一人でも多くの方とふれあい、自分を必要とする場所を見つけてみてください。自分たちで住んでいるまちは自分たちでという理想を理解していただき、ぜひ自治会活動にご協力いただきたいと思います。

活動の一部を紹介します。

- 防犯、防災、交通安全活動
- 環境美化、リサイクル活動
- 子育て支援、青少年健全育成事業
- 地域の親睦を図るため、地域まつり、親睦会等の行事開催
- 町会、自治会内の地域情報交換

～・～・～・～・～・～・ 以下略 ・～・～・～・～・～・～

3 発話データの分析と考察

ロールプレイにおいて、全調査対象者が共通して調査協力者に対して説明を行ったのは「自治会とは何か」と「自治会の具体的な活動内容」である。よってこのそれぞれの話題について述べている、ひとまとまりの談話（以下それぞれ「自治会の枠組み説明の話段」「自治会の活動内容説明の話段」と称する）を分析対象として取り上げ、各話段において、母語話者が調査紙の情報をどのように加工して非母語話者に提示しているかを比較対照し、その意図を分析した。調査紙と発話の照合を行うにあたっては、佐久間（2000）の『情報単位』を参考にし、以下のように照合の単位を設定した¹。

参考資料 2 - 1 情報単位で区切った、調査紙の「自治会の枠組み説明」の話段

1 自治会入会の 2 お願い

3 私たちは 4 より住みやすい街作りのために、5 地域の自治会活動の活性化を 6 目指しています。

7 自治会は、8 各地域内に住む皆さんによって 9 自主的に組織された 10 団体です。11 地域における様々な問題解決に 12 取り組むとともに、13 住民の生活環境の向上を 14 目指し 15 活動を行っています。

16 少年犯罪や凶悪犯罪の増加、17 ごみの捨て方や 18 犬猫のフン害等の 19 マナー問題など 20 いろいろな問題が 21 新聞紙上にも取り上げられる 22 昨今、23 住民どうしの繋がりの薄さが、24 社会問題の原因にあげられる 25 ようになりました。26 こんな時代だからこそ、27 自治会を始めとした、28 地域の地道な活動や 29 地域の人と人との繋がりが 30 大切になっています。（以下略）

参考資料 2 - 2 情報単位で区切った、調査紙の「自治会の活動内容説明」の話段

42 活動の一部を紹介します。

43 防犯、44 防災、45 交通安全活動

46 環境美化、47 リサイクル活動

48 子育て支援、49 青少年健全育成事業

50 地域の親睦を図るため、51 地域まつり、52 親睦会等の行事開催

53 町会、自治会内の地域情報交換

¹ 佐久間（1978）では、日本語の会話の単位について「話段」という単位の必要性を提案している。「話段」とは、一般に談話の内部の発話の集合体もしくは一発話が内容上のまとまりを持ったもので、相対的に他と区分される部分で、それぞれの参加者の目的となんらかの距離と関連を持つことによって区分されるとしている。また、佐久間（1995）では、「(略) 段の基本構造は、同じ話題を表す意味的なまとまりとして (略) 統括する点にあるといえよう。」と規定し、佐久間（2000）では、「文章・談話の直接成分としての『段』という言語単位の本質が『統括機能』にあるとすると、その基本的な構成要素は『提題表現』と『叙述表現』の組み合わせを基本とする『情報単位』だということになる」と規定している。

4 情報の整理・加工の方法とその意図

どの調査対象者も、自治会の説明を行うにあたっては、日本語能力が充分でない調査協力が理解できるよう、調査紙の内容をわかりやすく言い換える工夫を行っていた。しかしその言い換えの方法には様々なバリエーションが見られた。以下にその例を挙げる。

調査紙の情報単位 8：各地域内に住むみなさんによって

NST1：この、えーこのあたりの、(2 秒) あの、みんながですね

NSH1：皆さんが、こう住んでいる？エリアで、えーそこに住んでいる人たちが

NSI3：地域内に住む、我々、皆さんによって一

改変の程度の大きさの相違は一見して明らかだが、言い換え方にしても、たとえば「各地域内」を「住んでいるエリア」と言い換えるのと、「このあたりの」と言い換えるのとでは、発想が全く異なっている。前者は語彙をより平易なものに置き換えようという意図が窺えるが、指し示すものが広く一般に当てはまる「各地域」であることに変わりはない。しかし、後者はより一歩進めて「ここ」という聞き手の状況に即した場面に限定することで、より話題を具体的で身近なものにしようとしている。よってここでは各調査対象者の、調査紙の内容改変の発想と方法について検証していく。

4.1 分析の手順

分析にあたっては、以下の手順に従って行った。

- (1) 調査紙の情報単位と対応する発話部分を切り出し、番号を付す
- (2) 発話の各情報単位が調査紙の情報単位をどのように加工したものであるかを分析し、調査対象者がなぜそのような加工を行ったのかを探る
- (3) 各調査対象者の発話の、同一情報単位対応部分を比較対照し、加工のしかたの傾向をみる
- (4) 非母語話者との接触の頻度や関わり方のそれぞれ異なる調査対象者の、情報の再構成の特徴について考察する

作業においては、対応が認められる部分には対応する単位番号を付与し、調査紙との対応関係によって、以下の 3 種類の下線を施し、分類した。

- (1) 全体一致 (調査紙の 1 単位の全体が反映されている発話部分)

A 完全一致

例) 「16 少年犯罪や凶悪犯罪の増加」 → 16A 少年犯罪や凶悪犯罪の増加

B 自立語一致…自立語が一致または類義語に変換または構造を保持

例)「16 少年犯罪や凶悪犯罪の増加」→16B 日本では子どもの犯罪や凶悪犯罪が増えている

C 意味的一致…上に該当しないが、意味上的一致がみられる

例)「16 少年犯罪や凶悪犯罪の増加」→16C 未成年の集団窃盗事件や誘拐・殺人事件がよく起こるようになって

(2) 部分一致 (調査紙の 1 単位の一部が反映されている発話部分)

a 完全一致

例)「16 少年犯罪や凶悪犯罪の増加」→16a 少年犯罪の増加

b 自立語一致

例)「16 少年犯罪や凶悪犯罪の増加」→16b 子どもによる犯罪が多くなって

c 意味的一致

例)「16 少年犯罪や凶悪犯罪の増加」→16c 〇〇事件みたいなひどい事件は昔はあまりなかったんですが、今は怖い世の中になって

なお、照合作業は、筆者の主観のみによる判断をできるだけ排除し、認定に客観性を持たせるため、言語系の大学院修了者 2 名の協力を得、筆者を含め 3 名にて実施した。調整の結果、三者の意見はすべて一致をみた。

4.2 「自治会の枠組み説明」の話段における情報の加工の特徴

上の「調査方法」に従い発話に対応のみられる情報単位を、調査紙と発話の一致度によって分類したところ、以下の表のような結果となった。

複数の情報単位が融合しており分割が不可能と判断された部分については、情報単位の結合部分として別に分類した。各分類の合計数と対応単位の総数が合致しないのは、同一単位の繰り返しがある場合もすべて出現するたびに数えているためである。

表 1 情報単位の一一致度「自治会の枠組み説明」の話段

	対応単位数	A	B	C	a	b	c	結合
NST1	11	0	3	4	0	1	0	1
NST2	4	1	1	2	0	0	0	0
NST3	7	1	2	4	0	0	0	2
NSH1	9	1	5	7	0	1	0	1
NSH2	6	3	2	4	0	2	0	0
NSH3	41	41	0	0	0	0	0	0
NSI1	10	2	8	2	0	2	0	2
NSI2	1	0	1	0	0	0	0	0
NSI3	16	9	17	5	2	6	1	0

表 1 をみると、全文を読み上げた NSH3 と、対応する単位が一つしかない NSI2 は別としても、NST2、NST3、NSH1、NSH2 は C 類 (C+c) が最も多く、NST1 も B 類 (B+b) と同数なのに対し、一般母語話者の NSI1 と NSI3 は B 類が圧倒的に多く、C の割合が少ない。つまりほとんどの母語話者が何らかの形で調査紙の文章に改変を加えてはいるが、比較的一般母語話者は改変の程度が少ない、つまり調査紙の文章への依存度が高いということになる。さきに挙げた情報単位 8 の例をもう一度採り上げ、各調査対象者の言い換えの傾向を探る。

情報単位：8 各地域内に住むみなさんによって

NST1 : 8C この、えーあたりの、(2 秒) あの、みんながですね

NST2 : 8C 街の人で

NST3 : 8B 同じ街に住んでいる人が

NSH1 : 8B 皆さんが、こう住んでいる？エリアで、えーそこに住んでいる人たちが

NSH2 : 8C こちらのほうに住んでいらっしゃる方たちにはですね

NSI1 : 8B その町に住んでる人たちがですね

NSI3 : 8A 地域内に住む、我々、皆さんによって一

B 類の多い NSI1 と NSI3 の発話をみると、やはり情報単位 8 でも「各地域」「住む」「皆さん」という自立語すべてに対応する部分がみられ、その構成も同じである。単位 8 に続く部分についても、NSI1、NSI3 には共通した傾向がみられる。

情報単位：8 各地域内に住むみなさんによって、9 自主的に組織された

NST1 : 8C この、えーあたりの、(2 秒) あの、みんながですね、一緒に集まって

NST2 : 8C 街の人で、いろいろと、あの一します。

NSH1 : 8B 皆さんが、こう住んでいる？エリアで、えーそこに住んでいる人たちが、あの一、えー一入って、そこでみんなで力を合わせて

NSI1 : 8B その町に住んでる人たちがですね、9B 自主的に、あの一...自分たちから進んで、

NSI3 : 8A 地域内に住む、我々、皆さんによって一、9A 自主的に組織された

日本語教師とホストファミリーの発話の多くは、8 に続く部分がほとんど調査紙と対応しないのに対し、一般母語話者 NSI1 と NSI3 は続く情報単位 9 が原型を留めた形で出現する。他の単位についても、以下のように同様の傾向がみられた。

情報単位：11 地域における様々な問題解決に 12 取り組むとともに、13 住民の生活環境の向上を 14 目指し 15 活動を行っています。

NSI3：11B この地域で起きている様々な問題の解決に、12A 取り組むこと。それから、皆さんの、13A 住民の、生活環境の、向上。ま、13B もっと、生活の環境を良くしていく？ことを、14B 目的にして 15B 活動をやってるんですね。

「自治会の枠組み説明」の話段においては、同一情報単位であってもその提示のしかたには各調査対象者によって大きく異なり、言い換えにも調査紙の文章にかなり依存した形のもと、調査紙とは語彙や構成がかなり変更されているものがあること、また変更の大きいものはより具体化された情報となっている傾向があることがわかった。

4.3 「自治会の活動内容説明」の話段における情報の加工の程度

次に「自治会の活動内容説明」の話段における言い換えの特徴をみていく。この話段は「活動内容」が調査紙においては箇条書きで記されていることから、調査対象者がどのような意図で凝縮された情報に肉付けをし、具体性を持った内容へと開いていく作業を行っているかを検証していく。

「自治会の活動内容説明」の話段における情報単位の一致度は、以下の通りである。

表 2 情報単位の一致度「自治会の活動内容説明」の話段

	対応単位数	A	B	C	a	b	c	結合
NST1	9	10	4	5	8	5	4	1
NST2	12	2	2	10	6	2	4	1
NST3	12	3	3	4	3	3	1	1
NSH1	10	3	4	3	1	1	1	1
NSH2	5	1	1	4	0	0	1	0
NSH3	12	12	0	0	0	0	0	0
NSI1	11	4	4	6	7	2	1	0
NSI2	8	1	4	2	2	2	0	0
NSI3	12	5	6	1	1	0	0	0

上の表をみると、「自治会の枠組み説明」の話段と大きく違う結果となっている点として以下の二点が挙げられる。

- ① 全体に、全体一致の完全一致である A の割合が増えている
- ② 調査対象者によっては部分一致 (a b c) が全体一致と同等あるいはそれ以上に現れている

この 2 点が「自治会の活動内容説明」の話段に特徴的に現れるのはなぜか。各調査対象者の発話をみていくと、この話段における情報単位の説明のしかたのパターンが上の特徴に反映していることがわかる。以下実際の発話を比較対照しながら、その特徴の背後にある各調査対象者の意図を探っていく。

全文を読み上げた NSH3 を除いて、部分一致の割合も A の割合も最も多い NST1 の発話の、情報単位 43・44 対応部分は以下の通りである。

NST1 : 43A 防犯っていうのは、何か、えー43a 犯罪、ってわかりますか？43a 犯罪、43b 何か人が悪いことをする、たとえば 43c 物を盗んだりとか、43B そういうことが、えー地域で起こるとみんな困りますよね。でそういうことなるべく起こらないようにみんなで、注意する。それが、それが 43A 防犯です。43B 起こらないようにする、それが、悪いことが。それから 44A 防災というのは、たとえば 44c 火事、わかりますか？44c 火が、火で家が燃えたりしますね。43b そういうことも起こらないように、防ぐ。みんなで起こらないようにする、それが 44A 防災。でそれから、45a 交通安全はわかりますか？そうです、はい、45b 車とか人とか自転車とか、そういうのがうごいこと (ママ) が 45a 交通です。その 45a 安全ってのは何か、45B 事故がないように、そういうのを、

まず(1)の A の出現頻度の多さについて、上の発話からその原因を探る。NST1 の発話にみられる A の出現位置に着目すると、そこに一定のパターンがあることがわかる。情報単位 43「防犯」の説明にあたってまず「防犯っていうのは」と調査紙の情報単位を提示し、その説明の後、最後に再び「それが防犯です」と確認を行っている。44「防災」についても同様である。つまり提示と確認によって A が重複して出現しているため、A の出現数が増えているわけである。

同様に部分一致の現れ方にも一定のパターンがみられる。NST1 は情報単位 43「防犯」の情報単位を提示した後、「犯」の部分にあたる「犯罪」の意味を確認し、説明を行ってから情報単位全体の説明に移っている。つまり情報単位 43 をいったん「犯罪を防ぐ」という形に開き、さらに「犯罪」と「防ぐ」に分割し、「犯罪」を説明した後に「犯罪を防ぐ」とは具体的にどういうことかを説明するという段階的な説明方法をとっている。同様に 45「交通安全活動」についても、「交通」と「安全」に分割し、順に説明を行っている。よって部分一致の出現数が多くなっていると考えられる。

以下 NST1 のこの二つの説明パターンを軸に他の母語話者の発話を比較対照し、その説明のしかたの傾向をみていくこととする。

4.4 A の提示にみられる調査対象者の意図

A、つまり情報単位全体をそのまま提示する場合としない場合では説明パターンにどの

ような相違があるのか。また、1 情報単位を部分的に提示する説明パターンにはどのような特徴がみられるか。

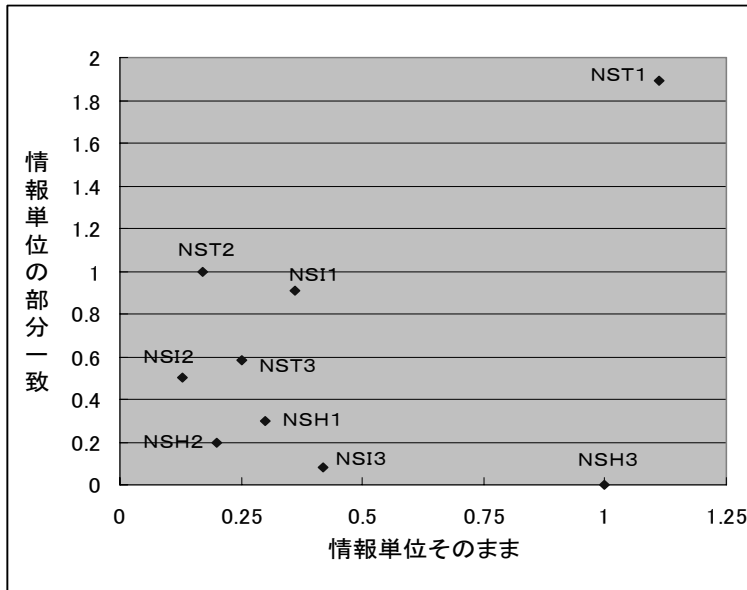


図1 対応単位数に対する全体一致の完全一致 A と部分一致 a b c の割合²

情報単位の全体一致の完全一致である A と、部分一致 a b c の、全対応単位数に対する割合を調査したところ、上の図 1 のように A の出現割合は NST1 がもっとも多く、調査紙を読み上げた NSH3 を除くと、次いで NSI3 と NSI1 に多かった。NSI1 にも、NST1 の、調査紙の情報単位をまず提示し、その後説明を行うという同様のパターンがみられた。

情報単位：43「防犯」・44「防災」

NSI1 : 43A 防犯てのは、43B 犯罪を防ぐ。ね。44A 防災。43B これはいろんな災害、火災だとかいろんな、地震とかそういう場合にみんなで助け合うとかですね、

一方、NSI3 は以下のように調査紙を読み上げるのみで、説明を行っていない、情報単位 A の連続部分が目立った。

情報単位：43「防犯」・44「防災」・45「交通安全活動」

NSI3 : やっぱりあの、45A 交通安全とか一、43A 防犯とか44A 防災のための活動。

² 図 1 の数値は表 2 に基づくものである。「情報単位そのまま」の数値とは、A/対応単位数、「情報単位の部分一致」の数値とは、a+b+c/対応単位数である。

このように、情報単位全体のそのままの提示が多い調査対象者でも、その説明のパターンがまったく異なる場合もある。よってここで A の提示の意図について整理してみる。

情報単位をそのまま提示する意図としては主に以下の 2 点が考えられる。

- ① 調査紙の該当部分を示して読み上げ、調査紙のどの部分について現在説明しているのかを非母語話者に明示するため
- ② その後の説明に備えて考えを整理する時間を設ける、つまり主題を提示しながら説明に必要な語や表現の検索を行うため

さらに、NST1 のように最後にもう一度 A が現れる場合は、同一情報単位の繰り返しのより確認作業を行っているとも考えられる。

では、一方、A の出現数が少ない説明のしかたとはどのようなものだろうか。上の表 5 では、NSI2 が最も少なく、次いで NST2 が少ないという結果になっている。

この二名の説明のしかたとは、たとえば以下のようなものである。

情報単位：43「防犯」・44「防災」・45「交通安全活動」

NST2：えーと **43c**泥棒、わかりますか？**43c**泥棒とかあと **44c**火事、あとは **45c**車、
情報単位：44「防災」

NSI2：うんそれからーこれはうーん...**44c**地震 earthquake、それから fire、このへん、

上の二名の発話においては、英語・日本語の違いはあるものの、43「防犯」を「泥棒」、44「防災」を「火事」「地震」、というように、単位の一部である「犯罪」「災害」を、その一例をもって代表させて提示することで、説明を終わらせているという共通点がみられる。こうした説明方法を選択した意図としては、以下の 2 点が考えられる。

- ① 情報量を極限まで減らし非母語話者の情報処理の負担をできるだけ軽減するため
- ② 具体化し、非母語話者の理解語彙に置き換えることで、理解を助けるため

以下に示す NSI2 の、上に挙げた発話に先立つ非母語話者とのやりとりをみると、NSI2 が試行錯誤ののち、①②の意図から「地震 earthquake、それから fire、このへん」という説明に至った経緯がみえる。

1NSI2：(用紙を示し) **43B**犯罪防止、うーん。(笑) えーとねー、

NNS8：(笑) 犯罪防止は一。

2NSI2：まあーそうですね。(笑) どちらの方なんですか、〇さんは。

NNS8：全部日本語で一。(笑)

3NSI2：あ、じゃあポルトガル語、なんです、…そうか

NNS8：あの一私はブラジル人です。

4NSI2 : そうか、難しいなー (笑)。うーん、(1 秒) そうですねー。(呟くように) ええ

NNS8 :

5NSI2 : 43B防ぐ、防ぐ、犯罪を...あー(3 秒)43Bto stop crime かな? to stop crime、

NNS8 :

ああーわかる。

6NSI2 : うんそれからーこれはうーん...44 c地震 earthquake、それから fire、このへん、

NNS8 :

NSI2 ははじめ 43「防犯」を「犯罪防止」と言い換えるが、非母語話者の理解につながらなかったため、「防ぐ、防ぐ、犯罪を」と適当な表現の検索に試行錯誤する過程を経、最後には英訳の提示という説明方法に到達している。そこで非母語話者の「ああーわかる」という理解を示す反応が得られたため、その後その提示方法が強化されたと考えられる。一方 NST2 の場合は、NSI2 のような試行錯誤の段階を経ずに最初からこの方法を選択していることから、日本語教師としての職業柄、経験的にこうした発想が身についていると思われる。

4.5 部分一致の多い説明にみられる特徴

3.3 で、NST1 の発話に多くみられる部分一致が段階的な説明方法の反映であることを述べたが、同様の説明方法は、やはり部分一致の多い NST2・NST3 の発話にも認められる。

情報単位 49 : 青少年健全育成事業

NST2 : それから、これ、49a青少年。49a青少年ねー。49bこう、〇〇さんのような、
(笑) そうあの一、女の子や男の子ですね。49Cその人たちに、えーと、いろいろ
いな、うーん、人 のことですね、健康のことだとか、社会のことね、それを
教えたりする、ことですね。これがいいことですよ、これは悪いことですよ、そ
れを教えること。

情報単位 43 : 防犯

NST3 : ま、えっと、43B犯罪が、ないように、43a犯罪は43b悪いこと、あの...43b
人をあの(刺すしぐさ)、殺したりとか(笑)盗んだりとか、43A防犯、

一方、NSI1 の発話には、日本語教師群と同様部分一致が多くみられるにもかかわらず、こうした段階的な説明は行われていない。NSI1 の発話における部分一致の現れ方は、たとえば以下のようなものである。

情報単位 46 : 環境美化

NSI1 : まー、46a環境ですから、46Cゴミを、町を掃除して、きれいにするとか。

情報単位 49 : 青少年健全育成事業

NSI1 : 49a青少年、今青少年の犯罪いろいろ出ているんですけども、49Cその青少年
に向けたですね、あの、取り組みですよ。

上の発話をみると、情報単位の一部を提示してはいるが、続く部分は全体の説明となっている。つまり情報を意識的に細分化して提示したというより、A を提示する際に後半部分を省略したと考えるのが適当なようである。よって、NSI1 の発話にみられる部分一致は a のみが多く、部分の説明にあたる b や c は少ないという結果になっている。

情報単位を細分化して部分の説明から全体の説明へと移行していく説明のパターンは、日本語教師群に特徴的で、他の調査対象者の発話にはみられなかった。こうした段階的な説明の意図は、非母語話者の情報処理の負担を軽減するために行われたと考えられる。日本語教師群は、情報単位の短縮された形を復元し（例：「防犯」→「犯罪を防ぐ」）、情報単位を構成する細分化された情報を一つ一つ検討して、非母語話者の日本語能力に応じた説明を考えるという作業をごく短時間のうちに行っているわけである。

ただ日本語教師群の説明のパターンにも若干の相違がみられる。上の NST2 と NST3 の発話には、NST1 が行っている情報単位全体である A の提示がみられず、情報単位の一部である a のみが提示されている。つまり情報単位全体を確認していったん短縮前の形に復元し、その後情報を細分化する、という作業過程は頭の中だけで行われ、細分化した段階で非母語話者に提示している。これはより非母語話者の情報処理の負担の軽減が意図された説明方法だと言える。NST2 の場合はその説明パターンがより顕著に現れており、よって A の出現数 3 に対して a の出現数は 7 という結果になっている。インタビューによると、NST2 は普段専ら初級の学習者を対象として指導を行っているということであった。その経験によって得られた、日本語能力が不十分な非母語話者の理解過程に配慮した説明方略が、今回のロールプレイにも生かされていると思われる。

5 情報の加工の方法

「自治会の枠組み説明」の話段でも、一致度が同じ B (b) または C (c) と判定された対応部分でも、その加工の方法がまったく異なるものがあることを指摘したが、「自治会の枠組み説明」の話段では、採用単位が調査対象者によって異なることから、比較対照することが困難であった。よって、本項においては、「自治会の活動内容説明」の話段において各調査対象者が情報単位をどの程度改変しているかではなく、情報単位にどのような加工を施しているかという観点から対応部分をみていき、その加工の意図について探る。

まず、調査対象者の情報単位の加工にどのようなバリエーションがあるのかを概観するために、全員が採用している情報単位の、各調査対象者の発話の対応部分を抜き出し、その説明方法の特徴別に以下の 3 通りに分類を行った。ここでは、43「防犯」の対応部分を例に挙げ、分類の観点を述べる。

① 説明しない（情報単位の提示のみ）

例 NSI3 : 43A 防犯 とか 44A 防災のための活動。

② 意味を説明する

i 名詞（句）を開く

例 NSI1 : 43A 防犯 するのは、犯罪を防ぐ。ね。

ii 具体化する

例 NST1 : 43A 防犯 っていうのは、何か、えー 43a 犯罪、ってわかりますか？ 犯罪、何か人が悪いことをする、たとえば物を盗んだりとか、そういうことが、えー 地域で起こるとみんな困りますよね。でそういうことがなるべく起こらないようにみんなで、注意する。それが、それが防犯です。

③ 例を挙げる

例 NSH2 : たとえば、夜、あのー 43C 暗い時に、いろんな人が、あの、こう夜道が危なかつたりするので、えー 見回りをして、その町全体を安全にするとか、

①は情報単位をそのまま提示し、まったく改変を加えないパターンである。つまり調査対象者は説明不要と判断したということになる。②はいわば「～とは」という定義の説明であるが、その中でも i と ii ではレベルが異なる。i では「犯罪を防ぐ（防止する）」という文を「防犯」と簡潔に短縮している情報単位を、逆に開いて省略部分を補う形で提示しているのに対し、ii では、「犯」「防」の辞書的な意味の説明を行っている。③では「防犯」という言葉の意味については説明せず、自治会活動における「防犯」とはどのようなものかの一例を挙げている。つまり「意味は何か」ではなく、「何をするか」を伝えようとしているという意味で、まったく発想が異なっている。この分類にしたがって、情報単位 43・48・51 に対応する各調査対象者の発話部分を分類したところ、以下のような結果となった。

表 3 情報単位 43・48・51 の説明方法

	43 防犯	48 子育て支援	51 地域まつり
NST1	②－ ii	③、②－ ii	①
NST2	②－ ii（一部）	②－ ii、③	③
NST3	②－ ii	②－ ii	②－ i
NSH1	②－ ii（一部）	②－ ii	②－ ii
NSH2	③	③	③
NSH3	①	①	①
NSI1	②－ i	②－ ii	②－ i
NSI2	②－ i（日本語） →②－ i（英語）	②－ ii	①
NSI3	①	②－ i	①

上の表をみると、②-ii の「意味を説明する」という方法がもっとも多く使用されていることがわかる。それに対して③の「例を挙げる」という説明方法はごく限られており、NST1・NST2・NSH2 三名の発話にしかみられない。その意味ですべての説明を③で行っている NSH2 は、他の調査対象者と一線を画している。NSH2 は、「わかりやすく説明する」ということに関して、インタビューの際に以下のように述べている。

NSH2：活動について、文面をそのまま話すのではなく、具体的な例を話したのは、項目を見てもどんな活動なのかピンと来ないと思ったため。たとえば自治会活動における防犯と他の活動における防犯では全然違う。相手が「わかった」と言ったとしても、自分がイメージしているものと相手がイメージしているものが全く違うということもあり得る。具体的なものを挙げたほうがはっきり確認できると思う。

上のコメントから、NSH2 が非母語話者の理解につなげるために、「言葉の解釈」ではなく「例示」を意識的に行おうとしていたことがわかる。

実際に、ロールプレイ後の非母語話者へのインタビューでこの活動内容について質問したところ、回答に誤解が目立った。たとえば以下のような例である。

情報単位 43 「防犯」について

NNS3：(私や他の人、メンバーが) 悪いことをしないこと。

NNS6：日本で泥棒がないこと。

また、情報単位の理解が不確か、または情報単位の意味は理解していたが、具体的な活動内容の理解に至っていない例も目立った。

情報単位 43 「防犯」について

NNS8：crime について、犯罪が多い

情報単位 53 「町会、自治会内の地域情報交換」について

NNS4：情報は information。情報交換はよくわからない。

以上の回答から、NSH2 が指摘するように、「言葉の意味がわかる」ということと、それが具体的にどのような活動かの理解とは別であることがわかる。ここではその言葉の理解に必要な背景知識の有無の影響が大きい。NSH2 は、その背景知識の相違を明確に意識しており、説明のしかたにもその意識が如実に反映されている。しかし、母語話者にとって、母語話者と非母語話者の背景知識の重なりと異なりを的確に判断することは容易ではない。たとえば、上の表をみると、51 「地域まつり」については、「①」が 4 名、「②-i」が 2 名と、全体に説明が省略されている。これは「まつり」自体が一つの具体的なイベントの名称であり、多くの調査対象者に説明不要と判断されたためだと考えられる。しかし実際には、インタビューでこれが何のことかわからないと回答した非母語話者も複数おり、

母語話者の推測する「わかりやすさ」と、非母語話者にとっての「わかりやすさ」にずれが生じていることがわかる。そうした中で、ここでも「③」の説明方法を選択した NST2 と NSH2 の対応部分は以下の通りである。

情報単位 51：地域まつり

NST2：えーと、たとえばここ、国立、という町ですね。国立のお寺、お寺で夏に、みんなで踊ったり（身振り）、食べたり（身振り）、盆踊り。そうですね。それは、この、地域の祭り、になりますね。

NSH2：盆踊りとか、この夏一に、盆踊りとかご存知ですか？えーとたとえば小学校とかそういうところで、こう皆さんが、こう踊りを踊って（身振り）、あの夏の行事なんですけどね、そういう盆踊りなど、そういうのをやったりとか、

両者とも、具体的な場所や、そこで何をするかを挙げ、動作を伴うことで視覚的なイメージも喚起し、より具体的なイメージを非母語話者に与えようとしている。

一方、NSI3 は、調査対象者のうち、読み上げた NSH3 を除くと最も説明が少なく、インタビューにおいても「あまりにもよくわかっているようだったので、もう途中から日本人と話しているような感覚で話してしまった。」とコメントしている。実際に説明相手の NNS9 は今回の非母語話者のうち最も日本語能力が高く、インタビューでも、「活動内容については NSI3 さんの話と紙を見て、大体理解できた。国の活動とつなげて、自分で想像した。」と述べていたため、どのような活動をイメージしたかを説明してもらった。以下が、NNS9 がイメージした活動内容の説明の一部である。

情報単位 45：交通安全活動

NNS9：家の外に車や自転車が走っていますから、私の子供たちも危ないから、国では道の始めにゲートがあって、大きな車が入れません。スピードを出して、道はちょっと（手振りで凹凸を示す）、ゆっくり走ります。そうイメージしました。

情報単位 48：子育て支援

NNS9：私の国にこういうことわざがあります。「7 ブロックは子供を教育しなければなりません」1ブロックは 20 から 50 のブロックです。世話する、守ると教えることです。子供が何か違反するとき、誰でも注意しなければなりません。

NNS9 の回答からは、言葉の意味は十分に理解していることが窺われる。そしてその意味を自分の既有知識に結び付けて理解しようとする過程が見える。その結果としてある程度イメージしたものが実際の活動内容に近似している部分もあるが、やはりところどころに、文化の違いに起因すると思われるずれもみられる。

また、非母語話者の回答で、もう 1 点特徴的だったのは、調査対象者の挙げた具体例が、以下のようにそのまま再現されることが多かったことである。

情報単位 46 「環境美化」について

NST1 の説明：そうですね、うーん、電信柱ってわかりますか？こういうまーいもので、電気の線が (1 秒) 電気、電話の線とか、たくさんありますよね、ケーブルとか。でそれが、その、柱がありますけどそこに、いろいろ、えー宣伝の、コマーシャルの、紙がたくさんあつたりします。(中略) そういうのもちよつと注意するとか。

NNS1 の回答：環境美化は、町を美しくなりますね。たとえばゴミとか、掲示板に悪いものを貼らないほうがいい。また電気の木に貼ってあるのはちよつと悪い。

情報単位 53 「町会、自治会内の地域情報交換」について

NST3 の説明：いろんな情報があるから、今日はここでこんなことをしますとか、今日はここで、何か日本語を教える、こう勉強会がありますとか、そういう案内とか、情報の、交換？(身振り) ですね、

NNS3 の回答：(地域情報交換は、) 日本語を教えること。そのインフォメーション。

言葉の意味の説明に対しては、説明は実際は行われているにもかかわらず、「わからない」「説明がなかった」との非母語話者の回答も多かった一方、上の例のような具体的な例示は非母語話者に強い印象を残していることがわかる。

6 まとめ

本研究においては、採用した情報を母語話者が非母語話者に提示する際に、どのような加工を施すかという観点から、各調査対象者の発話を検証してきた。調査紙の情報単位との一致度からは、一般母語話者が比較的情報の加工の度合いが低く、調査紙の語や表現に依存しやすいという傾向がみられたのに対し、日本語教師群・ホストファミリー群は一致度が低く、語彙や文構成の改変も大きい。一般母語話者のうち塾講師にも同様の傾向がみられた。よって、日本語弱者との接触の大きい母語話者ほど、情報を一度自分の中に取り込み、消化したのちに非母語話者の理解に合わせて再構成するという作業を多く行っていると考えられる。

また、次には情報の加工の方法について、各調査対象者に共通して現れる情報単位の対応部分の比較対照を行った。そこでは加工の方法として大きく「意味の説明」と「例示」という方法がみられ、「例示」という方法は非母語話者との接触の多いホストファミリーや日本語教師にのみみられ、「説明」もより具体化されているという傾向がみられた。非母語話者と同様日本語弱者である子どもを相手とする塾講師でも、最終的に説明は具体化のレベルに留まっており、例示という発想には至っていない。

背景知識の違い、イメージの喚起力といった点から、非母語話者へのインタビューからも、例示という方法は文化的差異の大きい事柄の説明には非母語話者の理解につながる有

効な方法であると考えられるが、この発想の転換は非母語話者とのコミュニケーションに慣れない母語話者にとっては一つのハードルであるとも思われる。

しかし、今回のロールプレイでは、半数以上の調査対象者が入会申込書の記入時に再度活動内容の説明を行っているのだが、その際の発話には、少しずつ加工の方法に変化がみられた。たとえば初回の説明においては調査紙をそのまま読み上げたNSH1の43「防犯」の説明は、情報単位そのままの提示から、意味の説明、活動例の提示、と次第に説明が現実の活動に即した形で具体化されていっている。ということは、非母語話者とのコミュニケーションの多寡によって「例示」という説明方法にすぐに辿り着けるかどうかの差はあるものの、「例示」がわかりやすいという認識は誰にでもあるということではないだろうか。とすればこうした説明方法のコツは訓練によって誰でも獲得しうると考えられる。よって、今後は、母語話者が誰でも持っている、日本語弱者との接触経験や自身の外国語習得経験から直観的に持っている、こうした発想の転換を強化する「やさしい日本語」化の訓練方法について、具体的な提案を課題としていきたい。

参考文献

- 今西利之（2007）「フォリナー・ライティングの具体例とその分析」『熊本大学留学生センター紀要』10
- 金子信子（2006）「外国人居住者による書き言葉使用場面参加のストラテジー—生活場面インタビューの事例より—」『多文化共生社会における言語管理—接触場面の言語管理研究1-4』千葉大学大学院社会文化科学研究科
- 河原俊昭・野山広（2007）『外国人住民への言語サービス』明石書店
- 佐久間まゆみ（2000）『日本語の文章・談話における「段」の構造と機能』早稲田大学日本語研究教育センター
- 佐藤和之（2004）「災害時の言語表現を考える—やさしい日本語・言語研究者たちの災害研究—」『日本語学』23-10 明治書院
- 志村明彦（1989）「日本語の Foreigner Talk と日本語教育」『日本語教育』68
- スクータリデス,A（1980）「外国人の日本語の実態(3)日本語におけるフォリナー・トーク」『日本語教育』45
- スクータリデス,A（1988）「日本人が外国人と話す時」『国文学解釈と鑑賞』53
- 西原鈴子（1999）「日本語非母語話者とのコミュニケーション—日本語教師の話はなぜ通じるのか—」『日本語学』18-6 明治書院
- 野田尚史・森口稔（2003）『日本語を書くトレーニング』ひつじ書房
- ロング,D（1992）「日本語によるコミュニケーション—日本語におけるフォリナー・トークを中心に—」『日本語学』11-13 明治書院

（つづい ちえ 言語社会研究科修士課程修了）